

悠久の旅路の果てに

ぴんころ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私はあの日、運命に出会つた／俺はあるの日、運命に出会つた
その出会いは、いずれの別れに繋がるもので。

私は貴方より長く生き／俺は君より早く死に
それでも、この想いは、嘘でも間違いないのだと信じて いるから。
今日も私／俺は、あなたのことを求めている。

悠久の旅路に、そのわずかな時間が私の中での幸いとなるよう に。

目

次

第十話	第九話	第八話	第七話	第六話	第五話	第四話	第三話	第二話	第一話
97	88	77	65	54	43	34	22	11	1

第一話

久永久遠という人物は、何をどう取り繕つても普通の人間としか言いようがなかつた。

その人生は平々凡々と言わざるを得ないものだつたし、なんなら今彼が巻き込まれてゐる異世界渡航にだつて、彼は一般人として巻き込まれるだけで、生徒会長をはじめとした中心人物とは違い、ただその恩恵を享受するだけ。

きっと、どこにでもいるありふれた人でしかなかつた。

そんな彼に一つ。たつた一つだけ人とは違うところを擧げるとするのなら。

それは彼が幼い頃から見ていた一つの夢。世刻望を始めとした永遠神剣の担い手たちが見るような、前世の夢なんてものではない。ただ、幼い頃の自分が、見たことのない少女と共に遊んでいる姿。

けれどそんな夢が何かに役に立つなんてことはあるはずもなく、飢餓感のような、満たされない感覺を抱えながらも一端のモブキヤラとして、物部学園二年生、神剣使いのうちの二人である世刻望、および永峰希美と同じクラスという、ありふれたどこにでもいる生徒の一人として過ごしていた。

それは、今日も同じこと。

学園祭の準備をしている最中、当時放課後だつた物部学園に準備のために残つていた生徒たちは、突如襲つてきたミニオンと呼ばれる生命体に襲われたが、当時ミニオンたちと同じ、けれどミニオンたちよりも強い永遠神剣を持っていたクラスメイトや生徒会長たちの力によつて学園ごと異世界に逃げ出すという荒技によつて今ここにいる。

その最中、「元いた世界の座標を割り出す」ことを目的として訪れた『魔法の世界』と呼ばれる世界にたどり着いた物部学園一行は、その世界に攻め込んできた、この世界を本拠地とする旅団。それと敵対している「光をもたらすもの」という、これまでの旅路にも、そもそも旅路の始まりにすら関わっている集団との戦いの時に、一般人は民衆の避難の手伝いをしていた。

久遠もまた、同様に。

そしてその戦いから数日が経つて、今日にでも元の世界の座標が出そうな時のことだつた。

「あれ？ 戰いは終わつたんじや……」

その日、久遠は座標を出すという、この世界の中心点、彼らが元々いた世界、その座

標を割り出すための機構である支えの塔から放たれたとても巨大な弾丸……彼の乏しい知識で言うのであれば、魔法の弾丸とでも言うべき代物を目撃していた。それが跳ね返つてくる様も。

あれ、さすがにこれはまずいのではないか。そう思う。破壊力とか、防げるのかどうかとか。彼は戦えない以上はそんなことは全くもつてわからない。

ただわかるのは、あれがなんだかやばそうだと言う感覚的な代物。それすらも、平和ボケした日本人の一人である久遠の感でしかない以上、大した意味もなさない。が、今回に関してはその感がぴったりと正解に当てはまっていた。

「まつず……！」

逃げようとする。逃げる場所なんて彼にもわからない。けれどあの塔から離れれば離れただけ届く衝撃は小さなものになるのではないかと考えたところで。

「――ん！」

何か、声が届いたような気がした。

どこから届いたものなのか、それが本当にこの耳に届いたのか。その事実はわからない。

けれど、彼が足を止めたのはきっと。その声が、昔から見ていてる夢に出てきている声にそつくりだったから。

他のどんな声だろうと無視して逃げ出すことができただろうに、その声だけはたとえ幻聴だったとしても無視することはできなかつた。

「なつ……」

視線を、その声が聞こえてきたと思わしき魔力砲撃の方向に向けると、何者かがその攻撃を受け止めている。

決して人間では受け止めきれないと思われるものを受け止めている何者かが確かにそこには存在する。

それに怯えるように、けれど同時にそこに向かわなければと思うように。二つの感情が重なつて足を動かすことができていない。

「え……あ……えつ？」

それが消え失せる頃、受け止めていた何者かも同時に落ちていく。その地点は幸いといつてもいいのか、それとも不幸と言うべきか。彼がいる場所からそう離れていない。さすがに受け止めたなら、落ちてくる高さと、見える範囲でのその生物の大きさからして久遠が地面のシミになるだけだろうからどうしようもないが、回収という意味では一番優れた場所にいるのは間違いくる久遠だった。

ドゴン！

激しい音がした。何者かが墜落した音。本当に無事なのか、そのことは気になるものの、神剣使いとやらが異常なレベルの耐久力を持つていることは久遠だつて知つている。だから無事なのだろうと勝手に判断して。だからこそ、問題となるのはそれが敵なのか、それとも味方なのか。たつたそれだけのこと。あれは、その存在の命を狙うために放たれたわけではないだろうが、落ちた何者かからすれば殺されかけたのだからそんなことは知つたことではない。

怖い、という感情がないわけではない。死にたくない、という生への執着も人並みにはある。

けれど、それらを通り越して、あの場所に行かないといけない。あの声の持ち主を知らないといけないという脅迫じみた心に体が突き動かされていた。

「…………え？」

たどり着いた地点。そこで目を回しながら気絶している少女。目を奪うほどに美麗な、長い蒼穹^{そら}色の髪。その御髪から目を離せないのは美しさからではなく、どうしようもないほどに既視感に苛まれてしまうから。

幼さに彩られながらも——いいや、だからこそその妖精。その、世に一つとない容貌は、どうしようもなく久遠の心をかき乱す。

「なんだよ、これ……」

頭が、痛い。

思い出せ。思い出すな。知つたことは世界から許されないと

記憶から消えてしまったその愛に、かつての過去を想起させるその髪の色。そんな過去は存在しない。
けれど——。

『ありがとう、くーちゃん。あたし、くーちゃんのこと、だーいすき！　おおきくなつたらくーちゃんと結婚する!!』

そんな、忘れられた存在しない過去のことを、幻視した。

「……つて、何考えてんだ俺。今、そんなことを考へてる場合じゃないだろ」

そこで頭を一度横に振つて、その少女のことを抱える。

自分は過去、この少女と出会つたことはない。それだけが事実だ。

おんぶは、少女が最初から気絶しているので落としかねないし、だからと言つて僕の
ように担ぐのは女の子相手にはどうかと思う。結果として取れる手段が、久遠に思いつ
く限りではお姫様抱っこだけ。

見られることが決まつている以上は、どうあがいてもからかわれる。最悪、幼女誘拐
犯と言われる可能性だつてある。あるが――

「この状況で放置は流石にできないよなあ……」

よつこいせ、と少女を抱き上げる。運動部でもない久遠は、流石に幼いとはいえ小学生程度の見た目ではあるこの少女を抱き上げるのは少々の苦労をした。

とりあえず、途中で神剣使いが誰か来たらそこで少女を渡そうと決めて、久遠はこの異世界旅行の際の拠点。物部学園をその背に乗せたものべーという巨大なクジラのいる場所にまで歩き始めるのだった。

* * *

「久永くん、何を考えてるの!!」

久永久遠がその少女を連れ帰ったところ、まず最初に受けたのはお説教だつた。
内容としてはなんてことはない。神剣使いに近寄つたことについて。だが、久遠が思つていたよりも、怒られる内容としては少なかつた。

久遠は、生徒会長であり、また神剣使いでもある斑鳩沙月にお説教を受けながらも、その少女を非戦闘員が多くいる場所に連れてきたことについてのお説教を受けないことについては逆に驚いていた。

「いい？ 相手は神剣使いなのよ。普通の神剣使いからすればただの雑魚でしかない”ミニオン”だつて、最初に学校が襲われた時に見たように、金属をバツサリと切れるの。それよりも強い私たちですら防げないような代物、それを防いだ相手に接触するなんて、死にたいって言われても仕方ないことよ！」

「はい、すみません……」

そうしてお説教を受けていて。

氣絶している以上はいつかは目覚めるもの。その目覚めの時がやつてきたという、クラスマイトである森信助からの報告によつて、お説教は終結した。

「えっと、あたし、ユーフォリアって言います。この子はゆーくん」

保健室。眠りから目覚めた少女の元へと向かうと、そんな自己紹介を受ける。

記憶喪失。保険医の代わりをしているヤツイータにそう告げられたことにわずかに落胆の感情が久遠の胸の内に湧き出るが、それも一瞬。誰かに気がつかれることはなかつた。

(ユーフォリア、ね)

もしかしたらこの既視感の正体を知っているのではないかと思つたが、彼女の言葉を信じるのであれば、記憶喪失らしいのでそれについては期待できないのだろう。心の中で唱えたその名前。既視感に執着しているという現実に、久遠は気がついていなかつた。

第二話

蒼穹の夢を見る。

それは幼き日の記憶。

彼の既視感の源泉となる、一つのありえない過去であつた。

『あたし、ゆーふおりあ。あなたのなまえは?』

その言葉を初めて聞いたのは、本当に幼い頃。三歳か、そこのこと。

『くおんつていうの? ならくーちゃんだね!』

少女は親とはぐれ、その先で少年と出会つた。

幼い二人。少女は少年と遊び、親が探しに来てくれるのを待つために少年の家に一時的に身を寄せる。

いずれ迎えに来る日まで。いつまでも、いつまでも。

『あたし、おおきくなつたらくーちゃんとけつこんする!』

その最中に、少女が言葉にした一言。それは童子の口約束で――

* * *

悠久のユーフォリア。

そう名乗つた少女が、記憶喪失であることは一日も待たずに学園中に知れ渡ることになつた。

そして、それと同時に少女の礼儀正しさ、可愛さ。そういうた、彼女を構成する諸々の要素によつて受け入れられることになるまでにそう時間はからなかつたことは、久遠のクラスメイトで写真部に所属している生徒、阿川美里によつて開催された『妹にしたいランキング』という謎のランキングで登場数日でぶつちぎりの一位を取つたことからもわかりやすい。

そんな謎のランキングについて物申したい気持ちは久遠にはあつたのだが、それが開催されるよりも先にユーフォリアの存在によつて久遠の周囲に変化が起きたために、未

だにそれは不可能なままだつた。

「なあ、ユーフオリア」

「はい、どうかしたんですかおにーちゃん?」

それとあたしのことはユーフィーって呼んでください。そう言つてぱーつと頬を膨らませているユーフオリアを相手に、多少辟易とした表情で、食事をしながら告げる久遠。用事があるとやつてきたユーフオリアだが、その用事をなかなか告げず、にこにこと笑いながら一緒に朝食をとっているので、久遠の方から話をすることにしたのだ。

目覚めてからこのかた、ユーフオリアは初対面のはずの久遠のことを最初からずつとおにーちゃんと呼んでいた。他の面々に対しては名前呼びしかしないのに。そのことについてだつた。

「起こしに来てくれるのは嬉しいんだけどさ。もう少し起こし方っていうものを考えてくれないかな?」

「ほえ?」

きよとんと首をかしげるユーフオリア。その可愛らしさには一切のあざとさを感じ取れず、ユーフオリアが「妹にしたい」と言われている理由を久遠は理解する。

けれど、その呼び方。おにーちゃんという呼び方は久遠にしかしないために、妹にしたい面々からすれば様々な形で嫉妬を露わにされている事実が確かにあって、そのせいで最近の久遠はクラスメイトたちに馴染めていない。

なんでお前だけユーフオリアちゃんにおにーちゃんと呼ばれているんだ、ということだつた。

実際、先ほど久遠が口にした、ユーフオリアが起こしに来るということも、他のクラスにはないらしく、ユーフオリアが久遠を起こしに来たおこぼれでクラスメイトたちもユーフオリアに起こされて幸せになつていて、という程度にしか、久遠以外に対しての恩恵はない。

久遠だけが、ユーフオリアに特別扱いされているのだ。

「いや、お前が俺だけを起こしに来るせいで、他の連中から睨まれてるんだけど……」「あう……」

ユーフオリアの頭についた翼を模した飾りがしゅんと垂れる。

時折動くその飾りが一体なんなのか。それについては久遠は知らないが、彼女のころと変わる表情に連動しているので、理解の外にあるものなのだろうと勝手に納得していた。

「おいおい、久永。何ユーフオリアちゃんを悲しませてんだあ？」

会話をしていたら、気がつけば周囲には人が集まっていた。屈強な人も、中にはいる。それらすべてが、ユーフオリアに特別扱いされていることが気にくわない連中だつた。自称「ユーフオリアちゃんを守り隊」なのだが、結局のところはユーフオリアのことが大好きなロリコン集団でしかないと久遠は認識していた。

実際、そんな奴にユーフオリアちゃんは任せておけねえなあ、なんて言っていた彼らだが、引き離そうと理解したユーフオリアがムツとした表情で前に出るとうつと言いながら後ろに下がる。

「なんですか、あたしのおにーちゃんに何か文句でもあるんですか」「い、いやそういうわけじや……」

グイグイと迫るユーフオリア。顔の近さに多少赤くなっているその頬を見て、こいつは口リコンなのかと戦慄する久遠。襟元についている校章、そこにはおまけに学年もわかるようになっている。見れば三年。つまりは久遠の先輩である。いくらユーフオリアの容姿が整っているとしても、そこまで顔を赤くするのは口リコンの証拠。悟った瞬間に少し引いた。

「落ち着け、ユーフオリア」

とは言つても、このままグイグイとユーフオリアに何か言わせたら、明日以降、ユーフオリアがいないう間に何をされるのかわかつたものではない。こいつらは要するにユーフオリアに構われている自分に対する文句を言いたいだけなのだ、と久遠は理解している。

ユーフオリアがかばうようなことをすれば、これ以降何をするのかわかつたものではない。もう遅いかもしれないが、一応は止めておく。

「つーん」

「おい、ユーフオリア……？」

なのだが、ユーフオリアはなぜか久遠の言葉に返事をしない。どころか、つーんなどと口にして聞こえてませんと言わんばかりの姿。

この数日、ユーフオリアが懷いてばかりの姿しか見ていなかつたために、そして今もユーフオリアは久遠のために怒つていたために、その姿を見て驚愕したのは久遠も、そして「ユーフオリアを守り隊」の面々も同じ。

けれど、その理由について予想がついたのが久遠の方が先だというのはやはり、共に過ごした時間の違いということだろうか。ため息をつきながらもおそらくは正解だと思われる言葉を放つ。

「ユーフォイー」

「！　えへへ、なんですかー？」

ぴよーんと、名前を呼ばれるとすぐに飛んできたユーフオリアにバフツと勢いよく抱きつかれる。ぴよこぴよこと羽飾りを動かして、まるで忠犬か何かにしか見えないユーフオリア。その笑顔はまるで向日葵のように輝いていて、さすがにユーフオリアちゃんを守り隊の連中もこの笑顔を崩すつもりにはなれなかつたらしい。気がつけば消えて

いた。

えへーえへへーと笑つて腰回りに抱きついてるユーフォリア。さつきまで何を話していたのかすら忘れてしまつたらしい。哀れ、ユーフォリアちゃんを守り隊はその存在をそこまで大きなものとは見られていなかつた。

とはいへ、これで「落ち着け」というのも……より正確には「あいつらには突つかかるな」というのもその当人がいなくなつてゐるせいで特に意味がない。

「なんで俺がおにーちゃんなんだ?」

きつと、誰もが気になつてゐること。數日間あつたのにも関わらず、なぜか誰も聞こうとは思わなかつた……というよりは誰か一人が「おにーちゃん」であるなら、きつと自分も呼んでもらえると思つて誰一人としてそこに言及しなかつたその事実に、ついに呼ばれている当人が触れた。

「ふえつ？　だつておにーちゃんはおにーちゃんですし」

「いや、別に血が繋がつてゐるわけでもなんでもないだろ……？」

「でも、おにーちゃんがそばにいると安心するんです。だからおにーちゃんはあたしの

おにーちゃんです」

理論だつた言葉ではない。安心、という言葉の意味はわからない。安心できる理由なんて、この数日間で見つかるような——いいや、初日からおにーちゃん呼ばわりだつたためにこの数日で久遠に対して知つたことすら、意味がない。

「おにーちゃんを最初に見たときから、おにーちゃんが優しい人だつて心がわかりました」

もしかしたら、どこかで出会つたことがあつたかもしませんね、と笑つて頬を擦り付けるユーフオリア。

既視感に苛まれる久遠としても、もしかしたらという思いがないわけではなかつたが、本当に出会つたのかもしないという思いが、そのタイミングでユーフオリアの言葉によつて明確な形を持つて膨れ上がる。

「少なくとも、俺の記憶にはお前に出会つた記憶はないよ」「なんですか……」

しゅんとするユーフォリアの羽。それを見て、さすがにこんな特徴的な相手に出会つていたら忘れることなんてないだろう、と膨らんだ疑念が縮んでいく。

だが、だからこそ、どうしてここまで既視感が強いのかわからない。

ユーフォリアと共にいれば、その疑念も解除されるのだろうか。そのことを望んでいるのかすらわからないまま、久遠は抱きついているユーフォリアのちよどいところにある頭を撫でる。

「ふにゃあ……」

「そういえば、ユーフィーは何か用事があるんじやなかつたか？」

「あっ、はい。 そうでした！」

そこで告げた言葉に思い出したと言わんばかりのユーフォリア。そういうところが子供っぽいな、と思わないわけではなかつたが、ユーフォリアの可愛らしさがはつきりと示されていることには変わりないし、これ以上話を長引かせるのもどうかと思つていた。

久遠たちは今回、調理班でも後片付け班でもないので、他の人に任せることになる。

その人たちの時間を縛り付けるわけには行かない。

「今日、デートしてください！」

第三話

デート、とユーフオリアは言葉にしたが、要するにその内容はただの買い物だった。

これまでの仲間には彼女程度の年頃の相手が存在しない。最低でも高校生程度の見た目の少女。だからこそ、ユーフオリアのサイズに合う服というものが物部学園にはなく、その気になれば他の友人たちから服を借りることができた学園の生徒や神剣使いに比べて、買わないといけない日用品というのは多かつた。

その荷物持ちを称して、けれど男女二人で出かけることには変わりないのでデートという言葉をユーフオリアは使用していた、ということだつた。

やってきたのは「魔法の世界」のデパート。

行き過ぎた科学は魔法と見分けがつかないということを称して「魔法の世界」と呼び名を与えられたこの世界。当然、そこにある品物は久遠たちがもともといた世界に比べて、比較することすらおこがましいほどの技術力によつて製作されている。

よつて、なぜか久遠たちにとつての元の世界。ユーフオリアが一度も行つたことのないはずの世界なのだが、なぜかそこと同じ程度の技術力を基本としているユーフオリアは、大層悩んでいた。

「えへへー」

「どうした」

不気味だぞ、とは口にしない。悩んでいるせいで一つ目の日用品、コップについては久遠がこっちの方がらしいだろ、と口にして、青色と桃色で悩んでいた中から青色を勝手にとつて購入した。その後からこんな風に幸せな表情をして、手をつないでいる。

ぴこぴこと揺れる羽飾りは幸せそうに。表情からも幸せです、とはつきりと見て取れる。なぜか指を絡めてきたユーフオリアに、逆らうのも面倒なのかされるがままになっている。

「おにーちゃん、次は服を見に行きましょう！」

「はいはい」

ふわり、と物部学園の制服、その短いスカートをたなびかせて、少女はつないでいた手を離して走り出す。

物部学園の制服というわかりやすい指標はあるとはいえ、ユーフオリア自身の背丈が

小さいせいで、人混みに紛れてしまつたら見失いそうだ。

少し離れたところでこちらを振り向いて笑顔で手を振るユーフオリア。久遠のこと

を待つてゐるのかその場から動く氣配は見えない。
わざわざ待つ必要はないだろうに。そう思つて苦笑して、けれど彼女は久遠がたどり

着かないとそこから動くつもりはないんだろうな、と思つて少し小走りになつた。

* * *

女の買い物は長い。そんな言葉を久遠は聞いたことはある。けれど本当の意味で
知つていたとは言い難い。なぜなら、彼にとつて女と呼べるような相手はそうおらず、
彼の人生で関わつたことがあるのは母親と、かつての少女だけ。そして後者に関しては
そもそも実在したのかすら謎。

よつて、女性と一緒の買い物、それも男女のお出かけと聞いて皆が想像するようなも
のを実行したのは初めてだつた。
そしてその結果――

「あー」

そんな間抜けな、気の抜けた声を漏らす程度には、精神的に疲弊していた。ユーフォリアの頼みを聞いてやつてきたことを後悔する程度には。

女の買い物は長い。昔から戦々恐々と伝えられ続けるその言葉には、男には理解できないほどの情念を一つ一つの小物に対しても向けている女に対する畏れを込めた言葉なのだと、ここで初めて久遠は理解した。

「ねえねえ、おにーちゃん。こつちとこつち、どつちの方がいいと思いますか？」

「……両方買えばいいんじゃないかな」

それだけのお金はもらっている。しかも、ただ施されるのではなく、彼女が覚えていないことではあるが俺たちが元の世界に戻るためにどうしても必要となる、元の世界の座標を算出する、しかもこの世界の中心でもある支えの塔を守つたことに対する正当なお給金なのだ。彼女が好きなように使えばいいだろう。

「むー。それじゃ意味ないじゃないですか。おにーちゃんはどつちがいいのか聞いてるんです。そんなどきとーじや困ります」

「いや、なんでだよ…………なら左で」

文句を言つても聞きそうにない。グイグイと両の手に持つたそれぞれの帽子を押し付けてくる。麦わら帽子とベレー帽。どちらであつても素材が最高級な以上は似合わないわけがないのだが。

帽子一つ取つても色々な種類がある。結局、最終的に買つたのは数種類程度。ただ、そこに至るまでに数時間程度かかつたことで、ようやく女性の買い物は長いと理解したのだつた。

「なら、こつちとこつちだつたらどうですか？」

——まだ終わつてはいないのだが。

* * *

「に、してもたくさん買つたな」

「えへ」

誤魔化すような笑い。

ユーフオリアにもたくさん買った自覚はあつたらしい。

買ったものはひとまとめにして久遠が右手で持っているのだが、左手はユーフオリアが両手で抱えるようにしているので、結局両手は埋まつてしまつていてる。

純粹にすぎるキンシップ過多。他の連中に見られたらおしまいだな、とわかりやすく目印をしている久遠は思う。

服装が二人揃つて制服のままなのは、今いる場所がザルツヴァイだから。

学生証を携帯しているか、あるいは制服姿であるか。

どちらかであればわずかではあるがサービスを受けられる。

それだけの価値が、支えの塔の防衛という事実にはあつたのだ。

「ま、いいけど。……それよりも、どつか他に見て回りたいところはないか？」

歩く二人は仲睦まじく。時間を確認すれば今はまだお昼時。

ユーフオリアが朝に宣言したデート、という言葉の割にはやつてていることは物足りないが、買い物を終えたのですでに予定は終了した。

なのだが、久遠には今変えればきっとまだユーフォリアのことを妹にしたい連中の目
が怖いので、もう少し時間を置いてから帰りたい。

そういう理由で、久遠はそんな言葉を口にしていた。

「連れていくてくれるんですか？」

とは言つても、ユーフォリアはそんな裏の意味までは汲み取れない。

ただ純粋に、デートだと喜んでいる。久遠の腕を握る力が多少強くなり、表情はよ
り楽しそうなものに。

えへーと言いながら、グイグイと引っ張り始める。

「まあ、先に昼食をとつてからな」

「はーい」

そんな言葉を口にして、二人は雑踏の中に消えて行つた。

* * *

「それで」

どうしてこうなつてるんだ？

言葉にならないまま、視線はユーフォリアに向いている。

久遠の姿があるのは、ユーフォリアに割り当てられた部屋。ここに彼はユーフォリアの手で連れ込まれた。

連れ込んだのがヤツィータ、あるいはクリスト族であつたなら、久遠も男の子ということで何かを期待したかもしれないが、さすがにユーフォリアという見た目も精神年齢も相応であるただの少女が相手ではそういう感覚も湧いてこない。

「おにーちゃんは今日からあたしと一緒です！」

「……いや、なんですか」

今日購入した部屋着にする服。それを着たユーフォリアのあまりにも唐突な発言に、

思わず突っ込む。

年齢に見合った……すなわちは貧相な胸を張つて堂々と語るユーフオリアはやつてやつたと言わんばかりの表情で。

多少現実逃避したい気分の久遠はひらりと舞つた、今日買つたワンピースの裾。それを見てやつぱり似合つてるなーなんてことを思う。

「えっとですね。さつきサレスさんから言われたんですけど、おにーちゃんを起こしに行くことになつてから、おにーちゃんのクラスメイトの人たちが起きるの遅くなつたらしいんです。そのことについて苦情が来ていたらしくて、なんでかおにーちゃんを隔離することになつたんですよ」

「…………ああ、なるほど」

理由を理解した。

妹にしたいと思える人物

ユーフオリアに起こしてもらえるという状況なんてそう体験できるようなものではない。だから、久遠のクラスメイトはユーフオリアが起こしにくるまで眠つてているか、眠つたふりをしている。

本来なら起床時間が遅くなつたという程度の苦情なのだろうが、そこに宿つてゐるの

は「お前らだけ起こしてもらえるのはずるい」というものなのだろう、とあたりはつく。
元々は、ユーフォリアに起こしに回つて欲しい、というようなものだつたのではない
だろうか。

「それで、理由はわからないんですけど、それならおにーちゃんだけ別にすればいいって
ことになつて、そのままあたしのところにおにーちゃんがくることになつたんです」

「……ユーフォリアが起こしに来なければいいんじゃないか」

「えー」

ぱすんと抱きついて来たユーフォリア。その表情には不満の色。そんなに起こしに
来たい理由がわからない。

その髪から漂う青空の匂いが鼻腔をくすぐり、少女の蒼穹の髪色と合わさつて、空の
下にいるような気にすらなる。柔らかい肢体と子供特有の高い体温。抱き枕には快適
な気もするが、それについては今はいい。

「なら、早く起きて全員を起こしに行くのは?」
「……迷惑にならないか不安ですもん」

本心から不安なのだとわかる表情。腹芸ができないであろうユーフオリアなので、これは本心からの言葉なのだろう。

……そんな表情をさせたいわけではなかつたので、侘びの代わりにぼんぼんと頭を撫でる。

その気配を察したのか、自分が撫でられて気持ちのいい、相手が撫でやすい位置にまで頭を移動させるのは、やはり撫でられ慣れているからだろうか。

「お前が起こしに行つて怒るやつなんていないだろうよ」

「本当ですか……？」

おにーちゃんも、と聞き返してくるのには曖昧に返して、後日全員を起こしに行つてみることを提案。

今から戻ろうにも、きっとそれは許してもらえないのだろうと理解して、仕方がないのでそのまま眠りにつく。

——後日。

朝、ユーフオリアが起こしに行こうとしたのはいいのだが、朝早くという条件が重なつたためか途中で寝落ちするという事態が発生し、その企画は倒れたのだった。

第四話

「おにーちゃん、おはようございます！」

朝、目を覚ますとひよっこりと布団の中からユーフオリアが顔を出す。
えへーと笑っている彼女は、今日に至ってはその笑顔も普段の数割り増しで輝いてい
る。

昨日、明日は早く起きないとダメですよーなんて言つていた通り、普段よりも一時間
程度は早い。

少女はすでに寝間着から普段の部屋着に変えている。全身からワクワクしている気
配、楽しみですという気配を隠せていないし、隠すつもりもないだろう。

「おはよう、ユーフォリー……」

今日も元気だなと呟くと、はいっ！ と大きな声で返事を返される。
まあ、それも当然なのかもしれない。彼も、今日という日をクラスメイト含めたいろ

んな面々から嫉妬と憎しみの視線で見られていなければ、きっと楽しみにしていただろうから。

なぜなら――

「だつて、今日は学園祭なんですから!!」

異世界に飛ばされることになった日。

あの日は、『学園祭の準備に人が集まっていた』のだ。

そして、ようやく気を抜くことができるタイミングがやつて來た。それは、学生たちに心の余裕が取り戻されたということであり、同時に神剣使いに対しての気遣いに対しても心を配る余裕ができた、ということでもある。

それによつて『本来ならもうやつていたはずの学園祭をやろう』と誰かが言い出したことが始まり。

今日は、本来ならいたはずの人物が欠けていたりするが、その代わりと言つてはなんだが異世界人も結構な人數いる。

そんな、普通なら決してできるはずのない学園祭の開始だつた。

* * *

あたしのところにも来てくださいねーと走り去つて行つたユーフオリア。

それを見送つた後に、周囲から向けられたのは嫉妬の視線。

基本行動がユーフオリアと一緒になつたこと、以前久遠に突つかかつた連中に対してもユーフオリアが不満ですと言わんばかりにぐいぐいと文句を言つていたことで、基本的にはユーフオリアに嫌われないようになると不満があつても口にはしないようになつた。

ユーフオリア
そのストッパーがいなくなつたことで、ついに嫉妬の視線が解禁された。

けれど実害はないのは、やはりユーフオリアがやつてくることを信じているから、だろうか。

「ユーフィーのせいで睨まれてるけど、ユーフィーのおかげで睨まれる程度で済んでいる。……これがマツチポンプってやつか」

本人にはそこまで考えが及んでいるわけではないだろうが。

まあ、ここでユーフオリアとの間柄が悪くなるのはイコールでユーフオリアに懐かれ

て いる彼に 実害が 出始める ことに 繋がる、 そんな 可能性が 残つて いる 以上 悪く する つも
りは 彼には ない。

そ うで なく とも、 見た 目の 年齢は 置い ておく とし ても、 あん なに 可愛い 女の 子に 懐か
れ て いる とい うのは 久遠 にと つて も 悪い 気が する ような もの では ない。

理 由が わから ない のは 不 気味 で ある が、 その 辺り に ついて は 今 調べる 必要 は ない。 い
ずれ 時間 が でき た 時、 い づれ 彼女 の 記憶 が 戻つた 時 に は わかる だろ うし、 懐か れ て いる
…… つまり は 悪い 感情 を 抱か れて い ない ので あれば、 その 理由 も 決して 悪い もの では な
い のだ ろ う。 そ う、 思つ て いる。

「……そ うい や、あの 子が 何を する のか は 聞い て ない な」

教 え て もら え な か つ た、 とも 言う。

当 日の お 楽しみ です と 言わ れた ので、 そ こま で興味 も なか つた こと も 合わ さ つて そ
れ 以 上 尋ね る こと を しな か つた のだ。

幸 い に も 場所 に ついて は 知つ て いる ので、 ど の 教室 で 何を やつ て いる のか が パンフ
レ ット に 書か れ て いる 以上 は そ の 気 に な れば 一 発 で わかる。 わかる のだ が――

「……少しぐらいは驚いてやるか」

そのパンフレットを開くのは、彼女のところに行つた後。そう決めて、パンフレットを開くことなく片付ける。

彼女が働くという時間帯は午前中だけ。午後からは一緒に動ける……というかおそらくは動くのだろうし、他のところを見て回るのはそれからでもいいだろう。

そう結論づけて、ユーフォリアが働いているという教室に向けて歩き始める。

* * *

「おかえりなさいませ、ごしゅじんさまー」

たどり着いた時、学園祭が始まつてからまだ數十分程度だというのに、大層並んでいた。それも男子ばかり。

久遠が並ぶと前に並んでいた男子たちが一齊にぐるりと久遠の方を見たのは、彼の心臓に悪かつたが、それも今となつてはどういう意味での視線だつたのかよくわかる。あれは、お前は普段からユーフォリア^{メイドさん}を独占しているだろうが、という嫉妬の視線。

……そう、メイド。

この教室の分類は喫茶店。その名称は“悠久”。詳しいことは知らないが、ユーフオリアがかつて言つていた、彼女が契約している永遠神劍の銘が『悠久』であることから、最初からユーフオリアをメインに据えるつもりだつたか。あるいはユーフオリアが手伝うと言つたからこの名前になつたのか。

メイド喫茶として生まれたこの店は、男子にとつての憩いの場となつてゐるようだ。

「あ、おにーちゃん！」

「……いや、俺に構つてないで仕事しろよ」

「おにーちゃんはお客様なんだから問題ないですよ？」

ぼすんと抱きついて來たユーフオリア。彼女もメイド喫茶にふさわしく、ワンピース部分が赤色のエプロンドレスに、頭の上にはホワイトプリム。要するにメイドさんの姿をしていた。

そんな彼女の発言を聞いて、やはり兄とその他の違いは大きいのか！　と叫んで崩れ落ちる男子生徒たちに対して、店員たちがゴミを見るような視線を向けている。

その中にはユーフオリア以外の神剣使い……一番最初に飛ばされた世界である、俺た

ちが「剣の世界」と呼ぶ世界で合流した、生徒会長である斑鳩先輩が所属する『旅団』の人間の一人、タリアの姿もあるし、その横で呆れたような表情をしているのはこの「魔法の世界」の大統領であるナーヤ・トトカ・ナンファイ。

「それにも、なんでメイド喫茶なんだ……？」

そんな疑問を漏らした時だつた。

「それはじやな

「ナーヤさん」

気がつけば真横にまでナーヤがやつて来ていた。どうやら事情を知つてゐるらしい。

「本来は制服の上にエプロンで、と言う話だったのだが、一部の学生達の強い要望で、このようなメイド服で接客する形式になつたのじや。『究極の癒し』を追求しておると、いうその学生達によれば、メイドの自己犠牲的献身的な姿勢こそが、現代における安息の絶対的な実在であるらしく……と何とも熱く語られて、その後糺余曲折あつて、こう

して喫茶店『悠久』が誕生した、と言うことじや」

「……その制服はどうしたんですか？」

そんなもの、この物部学園にはなかつたでしよう？」と言う疑問が湧いてくる。

だがその疑問は、それはですねと抱きついているユーフオリアからの言葉がかけられたことで氷解した。

「企画に賛同してくれた生徒さんが居まして、その人が一人で全部用意してくれたんですよ。とつてもやさしい人なんですね、きっと」

「いや、多分その人はやらしい人じやないか……？」

人間、欲望のためであればなんでもできると言うことか。少々驚愕と畏敬の念が瞳に表れていたのか、ユーフオリアはきよとんとしている。

「……ここに来ている時点であんたもやらしい人の仲間入りよ。自分だけ違う、つて顔してるんじゃないわよ」

まつたく、こう言うのだつて知つてたら、手伝いになんて来なかつたわよ。そんな人の良さが滲み出ることを言つてゐるタリアさん。

別にユーフオリア以外の途中参加の神剣使いとはそこまで親しいわけではないが、それでも「ユーフオリアと仲のいい生徒」と言う形で存在だけは認識されている。なので久遠は名前は知られていないが、他の有象無象とは違う立ち位置にいた。

「いや、俺はユーフィーから来てくれつて言われてたから来ただけだし……」

「えへー。……どうですか、似合つてますか？」

「うん、可愛い可愛い」

褒めると、笑顔が光り輝いた。

あとで一緒に回りましょね、絶対ですよ。そう言つてユーフオリアは仕事に戻つたが、それによつて周囲から向けられる嫉妬と憎悪の視線はより強くなつた。

これは人の多いところを歩いていた方がいいかな。

そうでないと殺されそつた、久遠はメイド喫茶“悠久”にて簡単な間食を食べてからまた別のところを回り始めるのだつた。

第五話

「おにーちゃん、待たせちゃってごめんなさい……」

パンフレットを確認して学園内部を回つていれば、別れてからそう遠くない時間帯にユーフォリアと合流することができた。

それでも申し訳なさそうな表情をしているのは、彼女の終了時間からしたら時間がかかるつているからだろうか。

「別に問題ないだろ」

「でも……」

ユーフォリアはそれでも自分が悪いと譲ろうとしない。

ユーフォリアの仕事終了時間を聞いていない、終わつた後の待ち合わせ場所を決めていない、そんな状態では待ち合わせも何もあつたものではないし、それを聞かなかつたという点では久遠も同罪ではあるのだが、根が良い子なユーフォリアからすれば、そこ

は自分が悪いということになるらしい。

譲らないユーフオリアにため息をつきそうになるが、そんなことをすれば余計に話がこじれそう。そう思つて、言葉を選ぶ。

「ユーファーに終わる時間を尋ねなかつたのは俺も同じなんだし、お前だけが悪いわけじゃない。……」ういう時は全部“おにーちゃん”のせいにしどけ

「あうあうあうあうあうあう……」

頭を多少乱雑に撫でていると、やめてくださいとユーフオリアが怒つてくる。が、それで多少は調子を戻したらしい。

ぶりぶりと怒るユーフオリアに苦笑しながら手を差し出すと、ころつと機嫌を直して以前と同じように右腕に抱きついてくる。ふにゃあ、と声を漏らしながらも頬を擦り付けてくる様はまるで猫のようで、微笑ましいものを見る目になつてしまふ。

「で、どこに行きたい？」

「えっとえと……それなら、ここで！」

パンフレットを開いて尋ねると、彼女が指差したのは天文部の出し物。

簡単なプラネタリウムをしているらしい。郷愁の念に囚われそうではあるが、ユーフ^妹オリアがそれを望むのであれば兄としては叶えてやらないとダメだろう。

「でも、なんでプラネタリウムなんだ？」

「だって、デートっぽくないですか？」

「デートっぽいことがしたいのか……」

「はい！」

そんな簡潔な言葉。これがユーフ^{年下}オリアではなくて、同級生だつたりしたらドキドキ

したりしたのだろうが、こんな幼女相手では特にそんなことはない。

なので、彼女の思い描いているであろう、『定番のデート』に当てはまりそうな代物をパンフレットの中から選ぶ。

クラスごとにやっているテナントもあれば、部活ごとに何かやっているテナントもある。

運動部は全員集まつての体力測定。一位になれば何かしらの特典がつくらしいのだが、それについてはあとで確認にでも行くとしよう。

* * *

「おにーちゃん。大丈夫ですか……？」

天文部のプラネタリウムは、学園が異世界に飛ばされる前の時点でかなりできていたのか、思っていたよりも本格的だつた。それが、見に来ていた生徒たちに故郷を思い出させて、涙を誘つてしまつた。その中にはもちろん俺も含まれていて。それが、ユーフォリアが心配そうな瞳でこちらを見上げる理由だつた。

「ああ、うん大丈夫大丈夫。それで、次にどこに行くんだつけ？」

「えっと、ですね。……次はお化け屋敷に行こうかなつて」

「お化け屋敷ね、了解」

お化け屋敷は、運動場のそれとは真逆の理由で作られた代物。

運動場が運動部の有志によつて作られた体力測定の場であるのなら、お化け屋敷は人數、あるいは時間が足りないせいで元々……この旅が始まる前にやる予定だつたものが

できなくなつた文化系の部活が集まつて作つたものだ。

例えば、人数が足りない上に、新しく仕込むには下地が存在しない人物ばかりなので元々の予定であつた『ロミオとジユリエット』をできなくなつた演劇部とか。

そうやつて、本来一つの出し物に対しても使われる人数の約二倍ほどの人数、しかも小道具などのエキスパートまでいる上に、お化け役者として他人を驚かせることにも特化した人物もいる。さらには文芸部などがお化け屋敷のシナリオを作つたことで、かなり完成度が高くなつていた。

「ふにゅうつ!? お、おにーちゃんあん……」

それこそ、いろんな相手に斬つた張つたを繰り返して來たであろうユーフォリアも怯えるレベルで。

元々、恋人デっぽいことを目的としていたことを考えれば『きやー怖い』みたいなことを夢見ていたのだろうが、それは彼女が思つていた以上の形で達成されている。

ビクツと怯えてこちらの腕に抱きついて、涙目でこちらを上目遣いで見つめるユーフォリアの姿は、ろりこんではない俺もドキッとしてしまいそうになるほどに愛らしい。

「ほら、大丈夫だから……」
「ほんとですか？」

「本当本当」

ユーフオリアを慰めながら進んだので多少時間はかかったが二人でお化け屋敷を終えて、未だに怯えている彼女のことを落ち着かせながら、次はどこに行く、と尋ねる。

ユーフオリアの状態的に一旦休んだほうがいいかとも思うが、彼女がまだ回りたいのであればそこは任せるべきであろう。俺は来年も学園祭はあるが、ユーフオリアに関してはあるかどうかわからないのだ。

だから、彼女のやりたいことを第一にするべきだ、という思いがある。

「だったら、運動場に行きましょう！」

「ぶーつ」

運動場。ユーフォリアのやりたいことというのは運動部有志による出し物。

体力測定に関しては神剣使い……戦うために鍛え上げて来た面々の名前が上位に燐然と輝いていたが、今の目的はもう一つの出し物。

学生プロレス。

常に殺しあう、本当の意味での戦闘を行う神剣使い。その彼ら彼女らからすれば競技としての、殺さないための戦いが珍しいのか、その会場には神剣使いの姿もあつた。タリアと同時期に仲間になつた男性、ソルラスカ。そしてその次にたどり着いた世界、『精霊の世界』と呼ぶ世界で仲間になつたルプトナ。

その二人が、特別マッチの相手として存在していた。

ホワイトボードには、彼らとのアームレスリングで勝利した場合の報酬。『俺達に勝つたら貰えるぜ！ 生徒会長の膝枕券!!』やら『十カティマ』やら『十ナーヤ』やら『十永峰』やら。

それらに惹かれてアームレスリング対決に参戦したせいで、ユーフォリアが頬を膨らませてぶーたれているのだつた。

「おにーちゃんなんか嫌いです」

「いや、だから悪かつたつて……」

「それぐらいのことなら、あたしが後でしてあげます！」

さすがにユーフオリアと一緒に回っている最中に他の女性に気を取られているのは悪かつたと思う。

それはそれとしてユーフオリアからの膝枕に関しては、別にそこまで欲しくはないが。

とはいって、他の生徒たちからすればそれはとても羨ましい物。よつて、ぶわっと吹き上がる殺意の視線。

ふん、とそっぽを向いて歩いて行くユーフオリアについていき、どうにかして機嫌を直してもらわないといけないと頭をフル回転させる。

結果、思いついたのはよくあること。

「あとで一つ、なんでもいうこと聞いてやるから……」
「本当ですか!?」

ただ、それに対する食らいつきはよくあるパターンよりもよかつた。
何をして欲しいんだ、と尋ねるとえつとと悩むユーフオリア。なんでもいうことを聞

いてもらえるということに対する食らいつきはよかつたけれど、実際にやつてほしいことは思いついてはいないようだ。けれど悩むこと十分程度。どうやら思いついたようで、同時に少しだけ冷静になつたのか、恐る恐るといった雰囲氣で。

「えっと、それなら……」

そう言つて、彼女が口にしたお願いというのは、思つてもみなかつたことで。
そんなこといいのか、と聞き返してしまようようなものだつた。

* * *

学園祭は一日だけ。そして一日は二十四時間。

どれだけ恋しかろうとその時間には終わりがやつてくるし、すでに俺たちの異世界学園祭は終わりの時間を迎えていた。

そのことを示すように校庭ではキャンプファイアが行われているし、その周りでは生徒や神剣使いが入り混じつて今日という日の思い出話に花が咲いている。

俺も、少し離れたところでユーフォリアと一緒にその光景を眺めている。あぐらをかいた俺の膝の上にユーフォリアがちよこんと座り、頭を擦り付けてきていた。

「それで、満足したか？」

「えへー」

「ご満悦」と言つたその表情を見れば聞くまでもないことなのだが、一応は尋ねる。

彼女からのお願いは、今日一日全力で甘やかしてほしいというもの。ゆえにこそ、今もこうして彼女を膝に乗せて好きなようにさせてているし、永峰のライブの最中も彼女の要求に応えて手を握つていてたり、周囲から口リコンに見られたり。いろいろなことがあつた。

「明後日には新しい世界に到着するんだつけ？」

「はい、そうらしいですね」

そんな中、真面目な話に立ち返る。

この学園祭は、次の世界に向かう最中に行われたもの。

支えの塔が修復されるまでの間に、隣のクラスの暁を連れ戻すことを目標として次の世界に進むことになつたために行われた、『本来なら旅路を終わらせても問題ない状況』であつたのにも関わらず、一人の我儘でさらなる旅路を続けることになつたことで、その当人が抱いたであろう罪悪感を、祭りの雰囲気で忘れさせてしまおうというものの、たどり着いてしまっては、きっとこんなに心休まる時間は得られない。そう思つて、ユーフオリアのお腹に回した腕に、より力を込めるのだった。

第六話

蒼穹の夢を見る。

それは幼き日の記憶。

彼の既視感の源泉となる、一つのあり得ない過去であつた。消去された

『ほえ？ これ、くれるの？ ありがとう、くーちゃん！』

あの時、彼女に渡したのは一体何だつただろうか。

目が覚めれば覚えていない、思い出すことを許されない過去を前に、そんなことを思
う。

そう、過去。

今はなぜか、この夢を過去と断じることができてしまつていて。

『でも、あたしおかえしになにあげればいいかな？』

何と返したのだろうか。わからない。自分が何を言つたのか、思い出すことができない。

でも、多分。何も知らないみたいなことを言つたんじやないだろうか。当時の俺からすればきっと、彼女の笑顔以上に価値のあるものはなかつただろうし。

『だめだよー。パパは、もううだけじゃだめだつていつてたもん!』

だからね、と蒼穹(ユーフォリア)の少女は語る。

その鈴の音のような声が耳朶を震わせている姿を見て、あれは麻薬だと、直感的に理解する。

あの少女こそが俺にとつての運命の女。己の身を破滅へと導く蒼穹(ファム・ファタール)の少女。

『だからね、あたしはぜんぶをあげる!』

その言葉に頷いてはいけない。
頷いてしまえば、俺は永劫に呪われる。

* * *

「あ、おにーちゃん。起きましたか?」

「ユーフイー……?」

どうした、と聞く必要はない。後頭部に触れる柔らかさ、上から彼女がこちらの顔を覗き見ている状況を鑑みれば、膝枕をされているのは明白。

さらさらと柔らかい手に髪を梳かれているが、その手も、そして後頭部から伝わる太ももの感触も、どちらもわずかに湿り、そして普段よりも体温が高いようで。

「お風呂、入ってきたのか?」

「はい。それで、帰つてきたらおにーちゃんが寝てたので……」

膝枕をしていた、と。

新しい世界……『未来の世界』と俺たちが呼ぶ世界は、その名前の通りもともといた地球が発展したかのような世界だった。それは、街中の建物という点も含めて。

だが、だからこそ。マナを使用しての建造物なども多かつたとはいえ、オイルの匂い

や汚れた空気もまた、地球とは比べ物にならないほどに発展していく、染み付いた匂いを取るためにか、かなりの時間を風呂に入っていたらしい。

「ちゃんと髪、乾かしてこいよ」

「えへへ……」

はにかむユーフオリア。彼女の髪からは未だに水滴がぽつぽつと。それが、しつかりと髪を乾かしていないことを示している。

ため息をつく。なんとなく、彼女が求めていることを理解した。どこにあつたかなと視線を彷徨わせれば、すぐに目的のものは見つかった。

体を起こす。あっ、と少し寂しそうな声を出したユーフオリアに、そういうえば学園祭の時に膝枕するって言つてたのは果たされたな、なんて考えて、目的のもの……ドライヤーを手に取りに行く。

「ほら、そこ座れ

「はーい」

なんだか慣れたなあと少々自分に呆れる。ユーフオリアが己の膝の上に座つて体を

預けていることにも慣れてしまった。そんな彼女の過剰すぎるスキンシップに対しても思わずくなつていてる時点で、なかなかにほだされているような気がする。

彼女の髪にドライヤーからの温風を吹き付けていると、キラリと視界の端に何かが光つて見えた。

「おもちゃや、 指輪……？」

そうだ。よく見ればおもちゃの指輪だ。

年季が入つてボロボロだが、それでも大事にされてきたのだろうとは思える程度には品質が保たれている。

ふにゃあ、と気持ち良さそうな声を上げていたユーフオリアもどうやら俺のつぶやきが聞こえたようで、その視線を自らの左手薬指に嵌められている指輪に向かって話した。

「これ、ですか？　この指輪はですねー」

少しだけ、過去に想いを馳せるようにしてユーフオリアが今までに見たことのない表

情に。彼女を膝の上に乗せている関係ではつきりとその姿を捉えられたわけではないが、わずかに見えた横顔にどきつとした。

その憂い顔は、これまでに見た見た目相応の少女然とした姿かははるかにかけ離れていたために。

「あたしの宝物です」

「へえ……」

曰く、これは大事な人からもらつたものらしい。

その人がどれだけ大事な人なのか、というのは彼女の語り口からして、予想はつく。小さい頃にもらつたそれ、くれたのはきっと好きな人だつたのだろうな、と思える程度には。

「ん、終わつたぞ」

「えへへ……ありがとうございます」

髪を乾かし終えて、彼女がその頭をいつものように擦り付けてくる。

それにしても、と思う。少女はこんなに無防備に他者に甘えている姿を見たら、彼女の好きな人とやらは大層怒るのではないかと疑問が湧いた。

俺にも彼女にもそんな気持ちは一切ないが、それは俺たちだからこそわかるもの。彼女の好きな相手はおもちゃとはいえ、わざわざ“左手の薬指にぴったりの大きさ”の指輪を渡しているのだから、つまりそういうことだろうし。

「ほら、そろそろ寝るぞ」

「はーい」

けれどそのことは口にしない。どうやら、この状況を俺も気に入っているらしい。

俺が布団に入ると、もぞもぞとユーフォリアも同じ布団に入つてくる。俺の上に乗つかった彼女は、ひょこつと布団から顔を出して、至近距離でにぱーっと笑う。

そんな彼女のことを湯たんぽがわりに抱きしめて、俺も微睡みに身を委ねるのだつた。

* * *

「ゞ）ほつ、ゞ）ほつ……！」

翌日になると、おにーちゃんが咳き込んでいた。どうやら風邪を引いたらしい。

そのことを伝えると、すぐに沙月さんたちが対策を取ってくれたけれど、どの異世界でもらつた、どんな病気なのか。そのことが全くわからないために、これ以上広がらないようになるとしかできない、と言われた。

なので、今の目的地にまでたどり着くまでの間、あたしが部屋に隔離されたおにーちゃんの面倒を見ることになったのだが、何をしてあげればいいのかわからない。

保健室は、他にも人が来るせいで、その人たちに風邪をうつすわけにはいかないからと使えないのだ。

「ゆー、ふいー……」

「おにーちゃん！」

名前を呼ばれた。急いで向かう。神剣の力を引き出しておけば、風邪に関するところまで気にしなくていいために、あたしたちだけがおにーちゃんのことを診ていられる。幸い、といつていいんだろうか。あたしは青と白の属性持ちだから、青属性の神剣魔

法で氷を生み出すことだってできる。今、おにーちゃんが使つてている氷嚢だつてそういうやつて生み出したものだ。

体温を下げるために使用しているにも関わらず、握つたおにーちゃんの手はとても熱い。あたしが握つたことがわかつたのか、その手には力が込められる。

「どうさん……かあさん……」

「……」

今この場にはいない、おにーちゃんの両親のことが呼ばれた。そちらに關してはどうしようもない。

あたしは、おにーちゃんと呼んでいるけれど、それでもずっとそばにいた家族ではない。

だから、それが少し――

「さび、しい……」

――寂しいのだ、と。

気持ちは同じ。

どうしようもなく 本当の家族には会えない事実があつて悲しいおにーちゃん、本当の家族にはなれない寂しさがあるあたし。

おにーちゃんは、人間なのだ。本当に、ただの。

神剣を持つて戦うことができる人物でもなければ、これまでに戦場に立つたことのある人物でもない。

そんな彼が、こんなことにいきなり巻き込まれて何も思わないはずがない。

年齢とか、いろんなことが重なつて隠すことには成功していたのだろうけれど、それでも思うことはあつたのだろうだ。

もしかしたら本人すら気がついていなかつたかもしけれないと、あたしのことを受け入れてくれたのもそういうことかもしけれない。

ちょっと嬉しいのは、両親よりも先にあたしの名前を呼んでくれたこと。そんな場合ではないのに、嬉しくて頬が緩んでしまう。

「大丈夫ですよ……」

だから、あたしも、おにーちゃんの手を強く、その存在を刻み付けるように握る。

「おにーちゃんのお父さんもお母さんもいませんけど、妹はそばにいますから」

第七話

「完全復活！」

わー、と言いながらパチパチとユーフォリアが手を叩いてくれる。
その顔は本当に復活を喜んでくれていて、見ているこちらも嬉しくなつてしまふほど。

思わず撫でると、笑顔になるのでついさらに撫でてしまう。

「えへー。もつとお願ひします」

「はいはい」

もつともつとどんどんせがまれるので、撫で方も過激になつていき、最終的に彼女のことを抱きしめて撫でているあたりでようやく正気に戻った。

「あ……」

か細いが、はつきりと聞こえる残念そうな声。少し罪悪感に苛まれないといえば嘘にはなるが、さすがにここで時間を使いすぎるわけにはいかない。

他の人たちにも復活したこと伝えなければならないからだ。

「あとで時間の許す限り撫でてやるから、な？」

「えへへ……はいっ！」

そんな会話を交わしてから、食堂の方に向かう。

その最中、ふと思う。そういうえば、と。本当に唐突にすぎる疑問。

この旅路が終わつた後、ユーフオリアはどうするのか、と。そんな疑問。

次の世界が曉がいる世界らしいので、イコールで世刻たちの旅路の最後……つまりは久遠もそこで元の世界に戻るという事実と繋がれている。

そこから『魔法の世界』に戻つて支えの塔に相対座標を出してもらつて、と色々とあららしいのだが、それでも明確に旅と呼べるのはこれが最後。

ならば、そのあとのことはどうなるのか。ユーフオリアは、記憶を失つてものべーに同行しているのだから。

「ユーフィーは、どうするんだ？」

「ほえ？」

だから、尋ねてみることにした。

彼女は何も考えていなかつたのか、あるいは何を言つてているのか理解できなかつたのか。きよどんとしている。

「いや、だから。この旅は次の世界で暁を連れ戻したらそれで終わりだろ？　そのあとユーフィーはどうするのか決まつてるのか？」

「あう……決まつてないです」

しょんぼりと肩を落とすユーフオリアに、あまりにも予想通りすぎて少し笑つてしまふ。

けれど、それなら好都合、と思つてしまふのは悪いことなのだろうか。

「なら、ユーフィーの記憶が戻るまでの間、うちに来ないか？」

きっと、両親もこんなに可愛い娘ができるとなつたら喜んでくれるだろう。

久遠としても、ユーフオリアと一緒に居られる時間が長くなれば嬉しい。
だからだろうか。今日の前でパチクリと大きな目で瞬きしているユーフオリアの返事に対し、わずかな怯えと期待が入り混じっているのは。

「えつと……お願ひします」

「おう、任された」

ペコりと下げられた頭。その姿にホツとしたが、さすがに兄としての矜持がある。そこはしつかりと隠して、ユーフオリアの頭を撫でる。

サラサラとした髪質。何度撫でても飽きは来ない。ふわりと漂うフローラルな匂い。同じシャンプーを使つているはずなのに、男子と女子では結果がはるかに違うなど疑問が出てきながらも、それを味わえるだけ味わい尽くす。

「それじゃ行くか」

「はいっ！」

皆に対して心配をかけたことを謝罪して、その後には最近幾ら何でも勉強から離れてしているのではないかと不安がっている椿早苗先生を安心させるために勉強会が行われることになつていて。

それに、俺も参加するのだ。幸いなことに先生は『現代国語』の先生である。当初から異世界人との間の意思疎通のために言語を教えてきた実績は伊達ではない。そうでなければ、先輩ルーラと同じ旅団スカカの人間はともかくとして、ルプトナは学園祭の時に文字を書くなんて不可能だつただろうし。

「あたしも、日本語は喋れるけど漢字？　とかはまだ書けないので楽しみです！」

「そつか……」

ユーフォリアが来るということで、様々な人間がユーフォリアと一緒に勉強したい！と叫んで、当初の想定よりも多くの人間が参加することが決まったのだ。

さすがに教師の前で変質者なことをする連中がいないとは思うが、もしもの時のため俺も参加する。一応、こいつの兄貴分なので。

「ま、頑張れ。わからんところあつたら俺も教えてやるから」「はい！ お願ひしますね、おにーちゃん」

* * *

勉強会自体はそこまで大きな事件が起ることなく終わった。
せいぜいがいつものようにユーフオリアが膝上に座ってきたので一部暴徒ロリコンが暴走した程度だ。

そんなこんなで肉体的には少し疲れた程度で済んだのだが、ユーフオリアはどうやら頭を使つたことで今までにない形での疲労を得たらしく、終わると同時に机に突つ伏す形で眠つてしまつた。

「まつたく……悩みなんて何もなさそうな顔してんなこいつは……」

ふにふにと柔らかい頬をつづいてみる。

柔らかくて、もちもちとした弾力があつて、押し込んだ指を押し返してくる。
ふにゅう、と声を漏らしながらユーフオリアが顔を動かす。

むずむずとするのか、顔をわずかにしかめるという、なかなかに見ない表情を広げて

「あむつ！」

「え、ちょつ……！」

つついていた指を食われた。

彼女の口に含まれたのは第一関節のあたりまで。

はむはむと唇を動かしているので、なんとも言えないくすぐったさが体に走る。

「ユーフォリアちゃん、かわいーー！」

「久永あ……！」

誰か、と助けを求めて周囲を見渡すと、微笑ましいものを見るような女子と、久遠に
対しての殺意を漲らせる男子しかいない。

助けを求められそうな相手が誰もいないという現実に彼はショックを受けて、どうす
るべきかと悩み始めるが、くすぐつたさが先行して考えがまとまらない。

「ほにーちやあん……」

寝言でも久遠の名前を呼ぶあたり、どれだけ懐いているのかよくわかるというもの。久遠本人もその愛らしさに頬を緩めて、同時にこの状況をどうにかすることを諦めてユーフォリアの好きにさせる。

そんなこんなでちゅうちゅう吸われていると、生暖かい何かがちろりと指に触れた。

「つ!？」

ぴちゃ、くちゅ。

粘り気のある悩ましい音が響いている。

それが舌であることに気がついた時には、丁寧に指の腹、指の先、爪と舐め進めていて、ちゅぽんという音とともに指が解放された。

周囲に視線を向けてみると、はわわと顔を赤くしている女性陣、そしてユーフォリーの微妙に色気のあるこの行動に前かがみになっている男性陣^{ロリコン}。まったく役にたたねえと切り捨てて、この状況をどうするべきかと思考する。

柔らかい唇から離れた指は、もちろんのこと唾液にまみれていて、てらてらと照明の光を反射して淫靡に輝いている。

妖艶にすぎるユーフオリアのやらかしに、誰かがゴクリと息を飲んだ。

「ふにゅう……」

「お、起きた……？」

誰かが呟く。

ユーフオリアが体を起こし、眠たげな目をこすりながらその瞳に久遠のことを映している。

先ほどまでの所業をユーフオリア以外の誰もが覚えているからこそ、彼女が何をしかすのかと恐れている。

「おにーちゃん……」

「ごろごろと猫のように、久遠のことを呼びながら頭を擦り付けている。寝ぼけていよいまいとやることは大して変わっていない。さすがに寝ぼけて指

を食うのは今回が初めてだつたが、それ以外ではいつものユーフオリアのまま。

ホツとため息をつく。

少ししてからユーフオリアの目ははつきりと覚めたが、何があつたのかについては誰も語らなかつた。

* * *

「ふにゃあ……」

おにーちゃんの胸板に頬を擦り付ける。あつたかい。なんだかぽかぽかして眠くなる。

勉強会の後に寝ちやつたせいで、今日は眠くはないのだが、この調子だとすぐに眠れそうだ。

普段は、おにーちゃんよりも先に寝てしまうので、おにーちゃんの寝顔を見るのは朝、起こす直前だけなのだが、今日は珍しくおにーちゃんが寝るところに立ち会えた。

「…………」

頭がちゃんと働いていないからなのだろうか。
どうにも、おにーちゃんの唇に目が引き寄せられる。

「誰もいない、よね……？」

わかりきつたことを呟く。

おにーちゃんも眠っている。

今からすることを咎める相手は誰もいない。ゆーくんも、やるならやつちやえつて
言つてくれるし。

ふらふらと、虫が灯に吸い寄せられるように、あたしもその一点を目指していく。

頭の中のどこかが、そんなことをしちゃダメだ、なんてことを言つているような気も
するが、今は気にしないでもいい。

パパだつて言つていた。やつて後悔する方が、やらずに後悔するよりもいいって。
……パパつて誰だつけ？

うん、まあ今はそれはいい。それよりも――

ぼうつとしながら、その一点に狙いを定めて……。

第八話

「おにーちゃん、おにーちゃん」

ユーフォリアに名前を呼ばれる。

今日一日ずっと展開されている、いつもよりも甘えるような声に少々の疑問を抱くが、それでも名前を呼ばれたことには変わりなく。

そちらを振り向くとえへーという声にも、普段よりも嬉しさを宿しているように思えた。

今朝は起きた時、唇周りになんかべタつく感覚はあつたのだが、それからだろうか。ユーフォリアが甘えてくるようになつたのは。

「どうした、ユーフィー？」

「えつとですねー」

歯を磨いてください、と。ニコニコ顔で言つてくる。

それぐらいは自分でもできるだろう、と流石にそこまではやつて上げる気にはならないので断つたのだが、断つたら断つたでしょんぼりとされるのは卑怯な気がする。

「そ、そうですよね……」

しょんぼりと落ち込んだユーフォリアの姿に、周囲からは無言の圧力。悲しませてやがるな、と言う視線の男子たちに、おにーちゃんでしょと言う視線の女子たち。

そのどちらもが、最終的には『ユーフォリアの願いを叶えろ』と言う一点に収束しているために、ため息をつく。

「わかつたわかつた

「ほえ……？」

「それぐらいでいいなら、いくらでもしてやるから……」

そう言葉にすると、ユーフォリアはわーいと喜び始める。

ただし、それはここですることではない。

ユーフオリアを見てほんわかしている学園の生徒たちには悪いが、部屋に戻つてからするとしよう。

* * *

「それじゃあ、お願ひしますね！」

「はいはい」

そう言つて、ユーフオリアは、んあーと口を開ける。

久遠の手には歯ブラシ。ユーフオリアからの頼みを聞いたことにより渡された、彼女の愛用の品。

以前一緒に買いに行つた、彼女のお気に入りの一品だつた。

それを、精一杯開かれた、ちつちやな口の中に入れしていく。

小さな口の中からは白い歯と舌が覗き、それが以前に吸われたことを思い出させてゴクリと息を飲む。

そのことは隠して、ゆっくりと奥の方の歯に毛先を当て、そつと前後に動かす。

「……ん、あう、う、……つは、……」

ユーフオリアの悩ましい声が響く。

くすぐったいだけなのかかもしれないが、そんな声を出されるとこちらは変な気分になつてしまふのでやめてほしい。
自分でやるのと人にしてもらうのでは違うと聞いたことはあるが、それも本当だつたということなのだろう。

「う、ひうつ、あう、……え、つ、……つふ、」

「……」

「えうつ、あ、えあ、……ひつ、う、……」

色っぽい、と感じてしまうのは自分が煩惱に溢れているから。そうでもなければ、こんなに幼い女の子に対してそんなことを思うはずがない。思つていいはずがない。
無心になれ。彼女が自分に対ししてそれを任せたのは信頼しているからで、それを裏切つていいはずがない。

そう言い聞かせることでどうにか理性を過剰労働させる。

歯ブラシを走らせる。小刻みに、丁寧に。しゃこしゃこ、規則的な小さい音が断続的に鼓膜を揺らしている。

いつの間にか半開きになつた目はとろんとしていて、いつもの天真爛漫な様相は形を潜めていた。目元には涙、上気した頬に浮かぶ玉のような汗。謎の緊張感で、俺の額にも同じように汗が滲んでいる。

「ひ、あ……つうう、んくつ、……えう、あえ、……つ、ひ、……つく、ううーっ」

普段、口の中を他人に弄られる機会なんて皆無に等しい。恋人同士の深いキスならば、相手に口内を委ねることもあるけれど、今の俺たちはそういうふた関係ではない。それなのに俺は一方的に彼女の口内を暴き、嬲っている。

「あ、くひい…つ、ひ、えあ、つーう、～～つ」「……つは、……！」

ユーフォリアがびくんと体を跳ねさせたところで終了させる。それ以上は何か、まずい気がする。

ゆっくりと歯ブラシを引き抜く。ユーフォリアは口を閉じることができないのか、惚けた顔でぼーっと天井を眺めていた。だらん、と力なく投げ出された手足が、完全に俺に預けられた彼女の体が、彼女の身を襲つた快感がいかに強いものだったのかをこれ以上なく明瞭に示している。

「ほら、ユーフィー。最後はちゃんと自分でな」
「ふにゃあ……はい」

ぼうつとしながらも、俺の言葉に返事だけは確と返し、コップに入れた水を持つて洗面台の方に向かう。

結局、彼女がこんなことをしてきた理由はわからない。予想はできても、実際のところはわからないままだ。

旅の終わりに、謎な思い出が一つ増えた。その程度にでも認識しておけばいいのだろう。

明日は、ついに暁を連れ戻すための最後の世界だ。これが、本当に最後の旅。これ以降は本当にただ帰るだけなのだから。

* * *

沈黙が重たい。

ここにいる誰もが、たつた一つのことが原因で意氣消沈している。

その中でも特に悲痛な表情を浮かべているのは、生徒会長である斑鳩沙月と、そして悠久のユーフオリア。

「落ち込んでいても仕方あるまい。次にどうするのか、それを決めなければならない」

「サレス！」

そんな中、言葉を発したのはこの集団のリーダー、サレス＝クウォーカス。旅団のリーダーでもあり、今一番怪しさが爆発している人物でもある。

その理由はたった一つ。今回の意氣消沈の原因を作り出した人物と旧知の人物らしき言動があつたために。

そして、個人の感情を慮らぬ言動に、もう一人意氣消沈していた世刻望の怒りが爆発する。

一般生徒一久 永 久 遠が攫われた。

言葉にすればたつたそれだけ。そこに、神劍使い永峰希美も攫われたという事実も重なるが、

『一般生徒を守る』と誓っていた斑鳩沙月、そして彼にとても懷いていた悠久のユーフォリアからすればその事実は受け入れがたいこと。

「……聞かせてちようだい、サレス。あの二人は何者?」

攫つたのは二人の神劍使い。世刻望の持つ破壊神ジルオルの力、『淨戒』を恐れて攫つていったことは彼らの言葉から十二分に理解していたが、攫つていった彼らが何者なのか、そのことについては知らない。

「あの二人は、理想幹神と呼ばれる存在だ」

その正体を告げたのは、新しく仲間になつた暁絶。

曰く、三人いた管理神のうちの一人。その最後の一人こそがここにいるサレスであり、彼はすでにあの二人とは袂を別つているという。

「本当ですか？　もしも嘘だつたりしたら……」

ユーフオリアの目が据わっている。ブンブンと己の永遠神剣である「悠久」を振るい始めている。

それだけの怒りなのだと理解して、サレスは冷や汗を隠しながらも頷く。

今現在、サレスから得た座標でものべーは出立している。

よつて、サレスが嘘をついている、あるいは非協力的……つまりは敵側であればその時点で決してたどり着くことはできないのだが、ものべーが動いている時点での座標には確かに何かが存在しているということ。

ユーフオリアは、もしもの場合、彼が袂を別つたというのが嘘であり、敵である可能性も理解していて、その上でその時は殺すという絶殺の宣言をなしていた。

「それで、どうするかということだが……」

このまま話を続けると何もなくとも殺されそうだと思つたサレスは、未来についての話に移る。

これまでの話は過去のもの。ここに至るまでの内容でしかなく、今必要なのは攫われた二人を助けるために何をするべきか。

「まず、大前提として。理想幹には“ログ領域”と呼ばれる場所がある」「ログ領域……？」

サレスの言葉に誰かがポツリと呟く。が、それは誰もが思っていること。いきなりの謎の用語の登場に、全員が首をひねる。

“ログ領域”とは、その名の通り、時間樹において起こつたあらゆる事象の“ログ”が記録されている領域だ。本来ログ領域は、時間樹内のどこにでもあって、どこにも無いもの。すなわち、位相のずれた空間にあるのだが、理想幹の中核であればそこに直接乗り込むことができる。……つまり、私たちのこれまでの戦いは全てログに載つているということだ。これまでの全てが対策を取られていると考えたほうがいい

「そんなの関係あんのかよ？」

「あるに決まってるでしょ、馬鹿ソル」

「ああ、その通りだ。あの二人が攫われたのも、“理想幹神では敵わない相手”を封じ込めるためだろうからな」

「関係ないですよ」

どういう状況かを説明する言葉が、ユーフォリアの冷たすぎる一言で切って捨てられる。

しんと静まる生徒会室。据わった目をしたユーフォリアは、本気の殺意を漲らせて、理想幹神を倒すための力を練つてゐる。普段であれば感知できるであろうに、一切のマナを感じさせないその姿にこそ、恐れを抱いてしまう。

「おにーちゃんたちを人質にする暇も与えなかつたらいいだけの話です」

「それは……いや、そもそもそうか。望は『淨戒』を使えば希美……『相克』に殺害されるが、ユーフオリアに関しては奴らは何もできない。それどころか、ユーフオリアに本気を出させないと、その一点を遵守するには、何があろうと彼を守らなければならぬ。……そういう意味では、問題ないかもしけないな」

会話は終わり、あとはたどり着くのを待つだけに。

第九話

「ここつて……」

目を覚ますと、普段とは違う……おそらくは保健室と思われる教室で目を覚ました。体を起こそうとするも、右腕は一切動かない。見てみれば、ユーフォリアが眠っている。

ただ、腕を動かそうとしたのを理解したのか、ユーフォリアがむずむずと動き始めている。

「おにーちゃん……？」

「うん、おはよ」

最後まで言葉は言わせてもらえなかつた。おはよう、というたつた一言。それを口にするよりも早く、ユーフォリアがほとんど頭突きのような形で抱きついてきたせいで、ゴフツと空気が抜けた。

けれどそれすらもユーフォリアは気がついていない。文句を言おうと思つて彼女の方を見れば、抱きついて顔をお腹のあたりに埋めながら、わずかに体が震えている。だから、何かいう気が失せた。

「ユーフィーは甘えん坊だなあ……」

よかつた、と呟く少女の頭を撫でる。

彼女は一体何に対してもホツとしているのかわからない。

だから、何があつたのかと尋ねる。覚えていないんですか、と涙目のままこちらを見上げてきよとんとした顔をしているユーフォリアの顔を見れば、確実に何かあつたのはわかるのだが……。

「えつとですね。おにーちゃんは攫われたんですね」

* * *

久永久遠は攫われたのだと、そう語ったユーフォリアは、その攫われるに至つた経緯。

ここに戻るまでの全てを語つてくれた。

まず、暁を連れ戻しに向かつた世界。そこで暁を回収したのはいいのだが、そこで暁を助けるために世刻が使用した『淨戒』なる力。それに対するカウンター兵器だつたらしい永峰が覚醒して、その状態の永峰を世刻のことを恐れている奴らが攫つていった、らしい。

そして同時、目の前のユーフォリア。それも恐ろしかつたらしく、仲がいい人物を攫つて盾にしてしまえばユーフォリアを抑えられるだろう。そう判断したらしいその相手は久遠のことも攫つたらしく、その状態から救出されたが眠つたままだつたのでユーフォリアがずっとそばにいた、ということを聞いた。

そしてその結果。

「もうおにーちゃんから離れません!」

ユーフォリアがむん、と手を握りそう宣言する。

彼のそばから離れなければ、誰かに攫われたりすることはないだろう、という考え方。

それはいいし、彼も命の危険が減るだろうから特に嫌がることではないのだが、一つだけ文句があるとするとなのなら――

「……トイレまでついてこないでもらえるか？」
「やーでーすー！」

引き離そうとしても離れず、トイレにまでついてこようとする。

一人にすれば攫われる可能性がある。それが原因だとはわかつてているがさすがにプライバシーという言葉を守つてほしいという思いは久遠にだつて存在する。

なのでどうにか引き離そうとしているのだが、頑固なユーフォリアは絶対に離れようとしないのだ。

「何やつてるんだ……確かに、久永だつたか……？」

「あ、暁！　ちょうどいいタイミングだ……！」

そこにちょうど現れた暁絶。騒いでいた場所が廊下なので、人が現れることは何もおかしなことではないのだが、それが暁絶（神剣使い）だつたことは幸いとしか言いようがない。

連れシヨンしようぜ！　そう語ると微妙な表情になつたが、その後のユーフォリアに對しての「ほら、暁がいるから！」という叫びとユーフォリアの不満そうな表情でなん

となく察したようだ。

「仕方ない。うちの最強戦力様が動けなくなると困るからな。連れシヨンに付き合つてやろう」

「助かる……！」

ほら、ユーフォイー。その言葉に不満そうながらもがっしりと抱き締めていた腕を解いて、ユーフォリアは久遠のこと自由にする。

二人してトイレに入ると、そこまで仲が良いわけではないので会話が発生しない。

なんとなく沈黙が氣まずいな、と思わないわけではなかつたが、話の内容なんて特別ない……そう思つたところで一つだけあることに気がついた。

「そいや、俺の救出ってどうやつて行われたんだ……？」

「なんだいきなり」

「いや、俺が攫われたっていうのは聞いたけど、どんな風に助けられたのかは知らないなと思つて」

「……結構簡単な話だぞ？　お前が人質にされている時に、サレスがお前のことを全力

で殺そうとしただけだ』

「…………は?」

『ユーフォリアに本気を出させないためにはお前を死なせてはならない』という前提があつたからな。お前を攫つた奴らは全力でお前のことを守らないといけなかつたんだ』

「……ああ、なるほど』

なんとなく、久遠にも何があつたのか理解できてきた。

いかにも間抜けな話だが、俺のことを攫つた相手が本気を出しても敵わないらしいユーフォリアの対抗策。それが俺という人質だつたらしいが、そのためには神剣使い同士の戦いに俺を巻き込んではいけない、俺が死なないよう全力で守らないといけない状態だつたために自分たちの守りがおろそかになつたのだろう。結果、俺のことを助けられる程度には相手に損害を与えたのだ、と。

「……間抜けだな』

『予測することが得意な連中だつたからな。予測の外にあるユーフォリア相手にはどうしようもなかつたんだろ』

そんなユーフオリアも、けれど久遠には特にそんなすこさが見て取れない。神剣使いとしての彼女を知ることができないという事実に多少の寂しさを感じながらも、久遠はそれを顔には出さずに連れショーンを終えてユーフオリアの待つている廊下に出る。

出たのと同時にユーフオリアが久遠のことを認識してぴょんと飛びついてくる。暁からすれば、仲間になつたタイミングで久遠が攫われていたので、ユーフオリアのそんな姿を見るのは初めてだつたので少しばかり目を丸くしながらも、気配を殺してその場を去つていた。

「はいはい、よしよし」

「ふにゅつ!?」

普段のように撫でると、わずかにびくんと震える。

その理由に一瞬思い至らず。けれど次の瞬間には久遠にも理由はわかつた。

「ああ、悪い。冷たかったか……？」

「問題ないですよ」

手を離そうとすれば、ユーフォリアがその手を取つて自分の頬に擦り付ける。

その掌はハンカチで拭いたとはいえ、手を洗つた直後なだけあつて未だひんやりしている。

本当に体温に関しては気にしていなさそうで、むしろ触つていられるのが嬉しいと言わんばかりの姿。

「おにーちゃんがここにいるつていうのがわかるから、問題ないです」

少し、その言葉にどきりとした。

今までと何も変わらないはずの言葉。今までと何も変わらないはずのユーフォリアの姿。

なのに、どこかこれまでよりも綺麗に感じて言葉を発することができない。

ちゅつ、と響いた音。

その音の正体がリップ音だと気がついたのはわずかに遅れてのこと。

ユーフォリアの唇が、手の甲に吸い付いていた、ということに気がついた直後のことだつた。

「ユ、ユーフィー!? 何して……!?

手の甲を見てあれーと首をかしげるユーフオリアに動搖を隠しきれずに尋ねる。あれーと言いたいのは自分の方だと言いたくなる程度には動搖していた。

「おにーちゃんがあたしのものだつて証です!」

おにーちゃんのことは渡しません! と堂々と宣言するユーフオリア。

先ほどまで抱いていたユーフオリアの女性らしさを一気に打ち消す子供っぽさにホッとした。

おそらくはキスマークでもつけようとしたのだろうが、つけ方を知らなかつた結果、と言つたところだろうか。

「ユーフィーは可愛いなあ……」

「あ、えへへ……」

さすがにそれ以上何かをさせるわけにもいかず、いつものように撫でるのだった。

第十話

「……おにーちゃんの世界に似てるんですか？」

「おう、本当にそつくりだ」

多少の違いはあれど、大体は同じ。

俺たち二人は、そんな地球そつくりな世界にやつてきていた。

あまりにもそつくりすぎるためにつけられた便宜上の呼称は『写しの世界』というものの。

通貨なども、おそらくは同じだろう。無銭飲食などになつたりしたらたまつたものではないので試すつもりにはならないが。

そんな中を、ユーフオリアと二人で手をつけないで歩く。

髪の色とか、目の色とか。色々と違いがありすぎるせいで兄妹っぽくはないのだが、周囲からは特に何か言われることもなく、それどころかユーフオリアの満面の笑みに微笑ましいものを見るような目で見られている。

「どうかしたんですか、おにーちゃん?」

「いや……今日はどうするかね、と思つただけだよ」

探し人が見つかる気配もなく、そもそも神剣使いだつた場合は俺には一切感じ取る力はないのだ。

なので、結局見て回るときに怪しそうと感じる、なんて基準は使えず、結果としてた神剣の気配があるだ面白そうな場所、見た目に怪しそうな場所をチェックするしかできそうにない。

世刻が夢でナルカナなる女性に会いに來いと言われたらしいのだが、逆に言えばそれ以外には何も手がかりが存在しないのだ。

その状況ではナルカナとやらを探すしかないわけだが、そもそもナルカナとやらがどんな姿なのか知らない、そもそも人間であるかどうかすら知らない以上は、俺たちには探すことなど不可能と言つても過言ではない。

俺も、ユーフオリアのおまけとして話を聞いただけなので、特に役立つとは考えられていらないようだが、それでも聞いてしまつた以上は自分だけ遊ぶのはちょっと、という気持ちもある。

「とりあえず、いろんなところを見て回りましょ! もしかしたら何かあるかもしね

ないですし!」

ニコニコと、俺の手を強く握りしめて引つ張り出すユーフオリア。

苦笑しながらもそれに付き添おうとしたところで、別のところから声が響いた。

「その必要はありませんよ」

「え……?」

反応したのはユーフオリア。だけどそれは見知らぬ相手に対する警戒ではなく、どこか呆然としているような様子で、これまでよりも動搖しているような気配すら感じる。

「初めまして、久永久遠さん。それと、久しぶりですねユーフィー」

「えっと、あなたはユーフィーの知り合い、なんですか……?」

それは、たおやかな女性だった。

こくりと頷いたことで風にさらりと揺れる栗色の毛。整った顔立ちは二人に向けられているようで、俺ではなく隣のユーフオリアにのみ向けられていた。

どうして俺の名前を知っているのか。そのことを問わねばならない状況でもあるはずなのに、それよりも先に『記憶喪失になる前のユーフォリア』を知っていることに対する動搖が出てきた。

「ええ。私は彼女の両親と知り合いですので」

写真もありますよ、と言われてしまえば納得するしかない。それを見せようとしている、見せることができるほどそのものが、彼女がユーフォリアの知り合いだという証拠になる。

ユーフォリアが記憶を取り戻してくれればそれが一番手っ取り早かったのだが、そうではない形ではあっても彼女のことはどうにかなりそうなのだから、それは祝福するべき事柄だろう。

これでお別れだと思えば寂しくは感じるが、それでも彼女が両親と再会できる、記憶を取り戻すことを目的として、この旅に同行させた経緯を考えれば、ここでお別れにならない方がおかしい。

「えつと……」

そういえば、まだ名前を聞いていない。そのことに気がついて、なんと呼べばいいのか一瞬悩んだ。

そのことに気がついたのか、その女性は倉橋時深という名前を名乗つたので、倉橋さんと呼ぶことにした。

「倉橋さん。それじゃユーファイーのこと……」

「いえ、そういう話にはなりませんよ？」

「……はい？」

「ユーファイーがこの世界にやつてきたことにはちゃんと理由がありますから。ですので、その目的を果たすためにも、そちらにいてもらつた方がいいのです」

それって、話の流れを理解できていなかつたユーフオリアが、倉橋さんのその言葉でようやく今の話の流れを理解したらしい。つまり、ここでお別れになりそうだつたということを。

「あたし、おにーちゃんから離れるつもりはないですよ？」

ぎゅうつと抱きついてきての一言。

その言葉は、明確な別れに対するカウントダウンが見えてきたことも相まって、わざかに切羽詰まつた様子を見せていく。

「ですが、いずれ別れは来ます。私たちはエターナルなのですから」「……エターナル？」

新しい単語。それを理解できるほどの知識はないが、それでもこの状態で使われる言葉にいい気はしない。

そして、ユーフオリアもそれであるという。
どことなく、不穏な気配を感じた。

「ええ。……まあ、長命種のようなものと思つてください。詳しい説明は後でしますの
で」
「長命種……」

倉橋さんも、もしかしたらこんなに可憐な見た目をしているのに八十歳を超えていたりするのだろうか。……いや、ないな。そんなに歳いってるのは思えない。だつて、どう考へてもこれは八十歳近い落ち着き方には見えない。普通なら知り合いの娘さんが記憶喪失になつてているのだから慌てるはずなのに、冷静なままでいるという時点で、その驚きを隠しているのだろう。となると今の落ち着き具合も本性ではない。多分、もつと若々しいはずだ。

「で、でも！　おにーちゃんが死ぬまで一緒にいることはできるはずです！」

「それをしたところで、私たちはこの世界に存在しなかつたことになる以上、あなたがそばにいたことで”誰かに常に世話をしてもらっていた”という事実は残つたままになります、他の誰かと一緒にしたことになるかもせんよ？」

「……いなかつたことになる？」

呆然と呟いたのは、その言葉の意味が理解できないから。
けれどユーフォリアも倉橋さんもその呟きを意に介さない。

二人してヒートアップし始めているせいで、俺のことを放置しだした。いや、別にそれは大して重要なことではないのだが。

正直、何が何だか今もまだわかつていない。でも、いなかつたことになるというのには気にかかる。

「それって、どういう……？」

「……ええ、そうですね。あなたも当事者ですし、知つておいた方がいいでしょ？」

エターナル。

それは第三位以上の上位永遠神剣に認められ者達の総称。生命体としての寿命が無くなり、殺されない限り死ぬことは無い。

一度世界から出てしまうと、その世界で接してきた人々の記憶から消えてしまう。

そんな存在。そして、ユーフオリアは永遠神剣第三位「悠久」の契約者。つまりはエターナル。

「そんな……」

呟いたのはどちらが先か。

けれどどちらもその言葉に思考は停止して、お互に對してどう接すればいいのかが

わからない。

彼女の目的が何かを知らないままではあるが、それが終わってしまえば最後、俺たちは永遠のお別れだ。たとえもう一度出会うことがあつたとしても、それは今こうして関係を紡いだ俺たちではなく、ユーフォリアのことを知らない俺と、俺のことを知っているユーフォリアの出会いでしかない。

ならば、どうするのが最善なのだろうか。後腐れのないように関係を終わらせてしまってべきか。それとも、このまま最後の瞬間まで全てを見ないふりにしてしまうべきか。答えなんて、わからない。

気がつけば、倉橋さんはすでにいなくなっていた。

どれくらい考えていたのかはわからないが、普通に日中だつたのに、すでに夕日が出てきているので結構な時間を考え事に使つていたのだろう。

「ユ……」

声をかけようとしてためらつた。どうするのが正解なのか。その答えがわからないために。

それでも彼女には十分だつたらしい。こちらを向いて、少し寂しげな笑顔を浮かべて

手を差し出してくる。

「……帰りましょう？」

「……そうだな」

握った手は、これまでよりも深く、強く、複雑に。
決して離さないと言わんばかりの気持ちがより強く現れていた。